# 陸前高田市と住田町の仮設住宅団地に関わる調査結果の報告

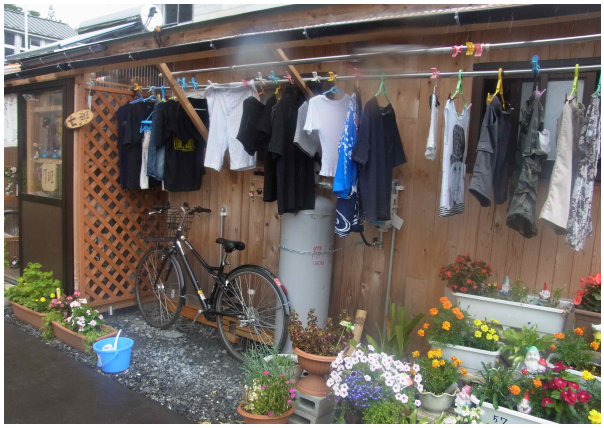
2012 年 10 月　明治大学都市計画研究室

**明治大学理工学部都市計画研究室では、昨年４月から月１～２回、陸前高田市を訪問し、仮設住宅での暮らしや住宅再建の意向を伺い、防災集団移転促進事業の学習会や住宅再建相談会等を開催してきました。今年も昨年の夏季調査に引き続き、8 月 2～8 日と 24～27 日の 2 期に分け、法政大学の現代福祉学部・社会学部・法学部の研究室と共同し、陸前高田地域再生支援研究プロジェクト（代表：宮城孝・法政大学教授）の一環で、仮設住宅団地の建物や住環境の調査を行うとともに、自治会長さんからお話を伺いました。**

**ここでは、その調査結果の要点を紹介します。詳しくは、「陸前高田の応急仮設住宅団地 調査報告《概要版》」をご覧下さい。**

## 自力再建による転出／戸建てを求めて転入

私たちが自治会長さんらに聞いた範囲内では、陸前高田市内の仮設住宅からの転出世帯は合計すると 70 世帯余で、そのほとんどが住宅を市内に自力で再建された世帯でした。転出後に空いた住戸には、陸前高田市外から戻ってきた世帯のほか、世帯分離して入居する世帯もありました。



木の温もりと生活感の溢れる住田町の仮設住宅

住田町の仮設住宅には現在、陸前高田市から約 70 世帯が居住していますが、そのうち 2 世帯は陸前高田市内の仮設住宅に入居したけれど、プレハブ長屋型の居住性が良くなかったため、住田町の木造一戸建てに引っ越してきたと伺いました。

住宅再建が決まっている居住者とそうでない居住者との間でコミュニケーションのギャップがあるという声を複数の団地で耳にしました。中には「いつでも転出できるが、できればみんなで一緒がいい」という自治会長さんもいました。

## 仮設住宅の居住と住宅再建に関わる不安の声

どこの団地でも、「居住者の最も高い関心ごとは住宅再建」でした。「生きているうちに仮設住宅で出たい」“小屋”でもよいから自分の家に移りたい」という居住者の切実で悲痛な思いを自治会長が代弁して伝えてくれました。

広田町や気仙町長部の仮設住宅の居住者は、ほとんどが地元出身者のため、住宅再建に関する情報交換や集団移転に関する話し合いは、仮設住宅団地内や近くの公民館で行なわれています。米崎町や矢作町では、仮設住宅団地自治会の連絡協議会が結成され、情報交換が行なわれているとのことです。こうした地域では、防災集団移転促進事業の実施に向けた目処はたったものの、人によっては住宅再建の資金面の不安から、「昼はニコニコしていても、夜は泣いている」という厳しい現実の一面を伺いました。

震災前に高田町や気仙町今泉に暮らしていた世帯が多く居住している仮設住宅団地では、「住宅再建に関する情報が全く入ってこない」という

声をよく耳にしました。「高齢者は、市の説明会に行っても内容が理解できないようだ」「復興に関する情報が平等に全ての人に届いていない」といい、情報不足が無用な不安とストレスをもたらしているようです。

## ひとり暮らしの高齢者等への声かけや見守り

陸前高田市内の仮設住宅の居住世帯の約 1 割が一人暮らしの高齢者です。小中学校の校庭や高校のグランドに建てられた仮設住宅団地に集中しており、近隣住民が声をかけたり、お茶のみ会に参加したり、親類が訪ね、あまり心配のない状況の団地が多いようですが、次のような課題がいくつかの団地の自治会長から寄せられました。

「近隣で世話しているけど、鍋の火を消し忘れてボヤ騒ぎになり、非常に心配。」「台所で倒れていたところを見守りの警察官が発見して一命をとりとめたことがあった。」「外に出てこないので、窓を破って死亡を確認したことがあった。」

今後、仮設住宅での居住が長期化するに従い、こうした緊急事態が増える懸念があります。現在、生活支援相談員や民生委員が定期的に見守りや相談支援活動を行なっています。地域包括支援センターや高寿園高齢者サポートセンターが高齢者向け配食サービスを開始していますので、こうした方々と連携を密にしていくことも重要です。

## 子どもが安全でのびのび暮らせる環境づくり

仮設住宅は、部屋が狭いため、「子どもが勉強する場所さえ確保できない」「親が子どもをストレスのはけ口にしている」という実態があり、自治会によっては、その代替手段として集会所や談話室を活用していました。

「駐車場しか遊び場がない」「砂利敷きのため生傷が絶えない」など仮設住宅団地内に安全な遊び場が少ないこと、通学路の夜間の暗がり、交通安全も課題として挙っています。

陸前高田市は、学校の校庭に建てられた仮設住宅の割合が他市町村と比べ際立って高く、それに関わる問題解決も大きな課題になっています。

## 同じように見えて異なる仮設住宅の居住性

「部屋が狭い」「収納スペースが足りない」という声はあちこちで聞きましたが、「隣の音が気になる」は団地によってまちまちでした。団地によっては「続き間のため、プライバシーの確保が難しい」「掃き出し窓でないため、火災時の避難が不安」という声が聞かれました。「水はけが悪く、床下に湿気が溜まりやすい」「雨漏りがする」という施工の問題を指摘する意見もありました。

この間、断熱材や風除室、二重窓、網戸、物置の設置、風呂の追い炊き機能の付加などの工事が行なわれ、居住性の改善が進められていますが、庇を取り付けても、「雨に濡れてしまって洗濯物が干せない」という団地もありました。

集会所や談話室は当初、10 団地にとどまっていましたが、県や外部支援団体等により、現在 22 団地に設置されています。加えて、空き住戸を集会所にしている事例が 12 団地で見られました。

団地周辺では、仮設住宅の居住者が利用可能な共同菜園を設けている仮設団地が見られ、「健康のために良い」「意見交換を行う場所になっている」といった声が寄せられました。

堂の沢仮設住宅団地のそばにある共同菜園